

「私はどこで生きているのか — 『本当に生きているのか』の呼び声—」

まさか？これは困ったことになったぞ！この忙しいのに…。これからどうするのだ？昨年の8月末、坊守（連れ合い）が病院で精密検査を受け、胃ガンと診断された。9月初めに入院、それ以後、入退院を繰り返しています。

口には出さなくとも顔に表れます。あるとき、退院して帰ってきたときなど、自分の仕事の忙しさを坊守のせいにし、冷たく臨んでいたことを、今大変恥ずかしく思えるようになりました。それというのも、「私が好きで胃ガンになったのではありません。一度あなたも同じように胃ガンになれば…」と強い口調で言われたことがありました。これは辛い現実から逃げずに、私の気持ちを聞いて欲しいという仏さまからの叫びであったのです。いかに自分を守ることが教えを聞くことより遥かに大事になっていたのか？引き受けたくない厳しい事実から目を逸らせ、一番苦しんでいる坊守と向き合うことをしなかった私が、実は「どこで生きているのか」を問われていたのです。

念仏者・浅田正作さんの「回心」という詩

自分が可愛い
ただそれだけのことで
生きていた
それが 深い悲しみとなったとき
ちがった世界が
ひらけてきた

を憶念させていただいています。

私のところまで伝えられてきた本願念仏の教えより、「自分が可愛い」という執着のみで生きていたことが一つの悲しみとして自覚されたとき、初めて仏さまの悲しみと共鳴するのでしょうか。この限りない課題を私の問題としていただき続けていく仕事を生涯尽くしてまいりたいと思います。